

# 魏晉洛陽都城制度攷

外 村 中\*

## はじめに

曹魏の明帝が亡くなった景初三年(239)頃に倭の女王卑弥呼の使者が訪れた魏晉の帝都洛陽は<sup>1)</sup>、後漢の都城制度をほぼそのまま継承したものに過ぎなく、洛陽が大きく改修されたのは北魏になってからであると従来考えられてきた<sup>2)</sup>。しかしながら、文献資料や考古学的調査の成果を見ると、そうではなかったように思われる<sup>3)</sup>。洛陽の都城制度は、とくにその宮城の制度は、魏晉の頃に大きく変化していたようである。では、これまでの通説は何にもとづくものであったか。また、魏晉の洛陽は、後漢の洛陽とは制度を異にしていたとすると、中国の都城制度史上如何に位置づけられるか。小稿では、基礎的資料の内容を再確認しながら、以上の点などについて初歩的な考察を行ってみたい。

なお、すでに同様な解釈が銭国祥氏によって発表されている<sup>4)</sup>。筆者は大方見解を同じくするが、銭氏の解釈には疑問と思われる点がないではない。また、その中には魏晉の洛陽の特徴を考える上で極めて重要な点も含まれているので、指摘しておきたい。

## 一、先行研究

### (1) 後漢洛陽

先学の研究成果にもとづき、まずは後漢の洛陽を確認しておこう。

図1は、王仲殊氏による復元図である<sup>5)</sup>。南宮と北宮とによって構成された後漢の洛陽の最も代表的な復元図であるが、南宮南壁の位置、都城西壁の上西門の位置に問題がありそうであ

---

\* Ataru Sotomura Institut für Kulturwissenschaften Ost- und Südasiens, Sinologie, Universität Würzburg

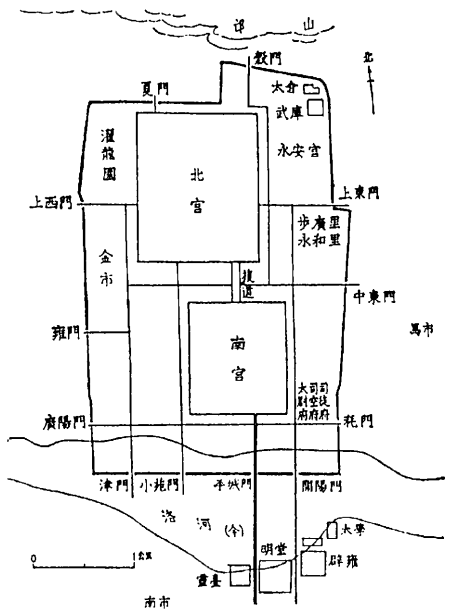


図1 王仲殊，東漢雒陽城平面図

る。また、都城南壁の平城門の位置にも問題があるかもしれない。そう思われるのは、次のような理由による。まず、南宮南壁は王氏が示す位置よりもさらに南にあったようである。というのは、『後漢書』によれば、都城南壁に平城門があったが<sup>6)</sup>、平城門は南宮の宮門であったといわれ<sup>7)</sup>、また、『後漢書』には「南宮平城門内屋」とあり<sup>8)</sup>、平城門の内、門に近いところに建物があったようなので、少なくとも南宮の一部は都城南壁のすぐ内あたりにあったように考えられるからである。次に、王氏は都城西壁の上西門を北魏の閭闔門の位置に置くが、『水經注』によれば、後漢の上西門はそれよりも北に位置していたようである<sup>9)</sup>。また、王氏は都城南壁の平城門を北魏の平昌門の位置に置くが、その門は

魏晉の時に開かれた門ではなかろうかと筆者は考えるので、直ちにはしたがえない。平城門は王氏の示す位置より左すなわち西に位置していたかもしれない(後述「都城十二門」を参照)。

一方、王氏とはまったく異なる見解によるものとして、楊守敬氏の復元図があげられる(図2)<sup>10)</sup>。楊氏は、彼の復元図に記載の内容および彼の『水經注疏』によれば<sup>11)</sup>、洛陽の宮城は秦より北魏まで一貫して同じで変化はなかったと考えているようである。しかしながら、後述するとおり、洛陽の宮城は魏晉の頃に大きく改修されたようなので、少なくとも後漢の南宮の位置については問題がある。

王氏とは異なる見解によるもう一つの例として、Bielenstein, Hans氏による復元図がある(図3)<sup>12)</sup>。Bielenstein氏は、以下で確認するように、後漢の崇徳殿は後漢の南宮ではなく北宮に位置していたらしい点をいち早く指摘したことにより注目されるが、『後漢書』李賢注に引く蔡質の『漢典職儀』に見られる「兩宮相去七里」を<sup>13)</sup>、北宮と南宮は七里離れていたとそのままに解釈したため、彼の図は、都城の中心部付近に宮城があったことを示す『水經注』の内容や考古学的研究の成果と大いに食い違うものになっており問題がある。

以上が従来の代表的な例である。これに対して、銭国祥氏が、新たな復元図を提示した(図4)<sup>14)</sup>。その図を見るに、まず王氏の図の南宮南壁の問題に銭氏も気が付き修正を行っている。それにより、南宮についてはこれまでで一番適切な復元図になっている。しかしながら、都城西壁の上西門および都城南壁の平城門の位置は王氏の図と同じであるので、いまだ問題は解決

魏晉洛陽都城制度攷（外村）

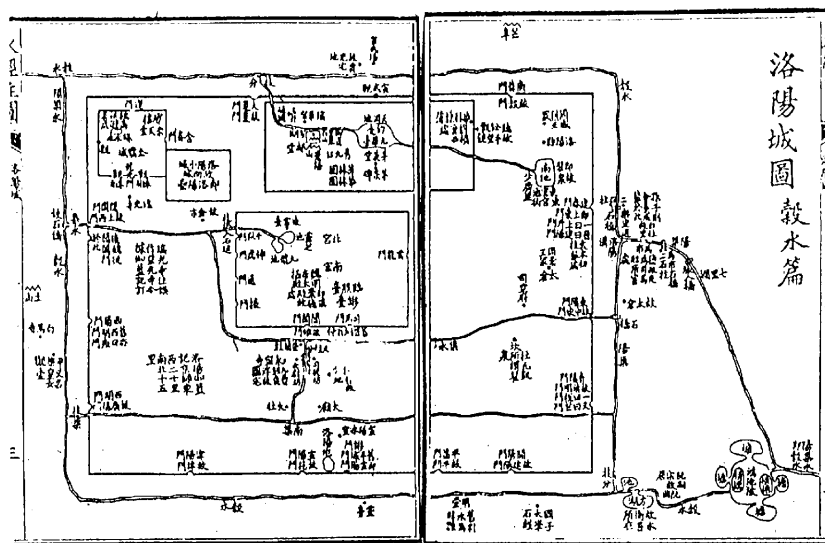


图2 楊守敬，洛陽城圖

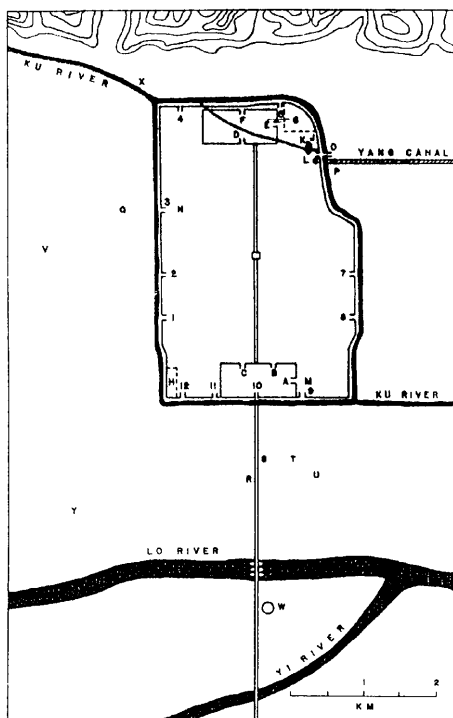


图3 Bienenstein Hans, Lo-yang in Later Han Times

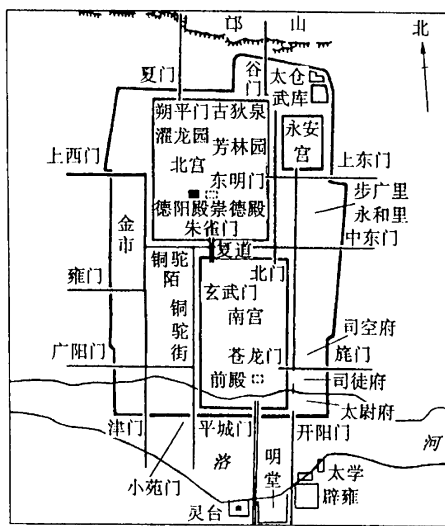


图4 錢国祥，東漢洛陽城南北宮平面布局復原示意图

していないように思われる。また、北宮については新たな問題が生じている。たとえば、濯龍園が北宮の内に記されている。しかしながら、『後漢書』には、園は北宮の近くにあったとあるだけで<sup>15)</sup>、北宮の内にあったとは記されていない。また、古狄泉も北宮の内に記されているが、文献資料によれば、そうではなく古狄泉は彼の図の永安宮が位置するところにあったようである（後述「宮城東・歩廣里・東宮」を参照）。なお、「両宮相去七里」については、王氏は考古学的見地から「一里」の誤りであろうとするが<sup>16)</sup>、これに対して、錢氏は南宮の正殿から北宮の正殿までの複道の長さが七里であったとする<sup>17)</sup>。筆者は文献資料を出来る限りそのままに読みたいので、この点については錢氏の解釈にしたがいたい。

## （2）魏晉洛陽

従来の通説では、都城と宮城の主要部が同じようなので、魏晉の洛陽は後漢の洛陽を継承したものに過ぎないと主張されてきた。確かに、魏晉の都城は、曹魏の明帝の時代に都城内西北隅に新たに金墉城が造られたことを除けば<sup>18)</sup>、後漢の都城を大方そのまま継承したものである。この点は『洛陽伽藍記』序などに曹魏の都城門が後漢の都城門をそのまま継承したものであるが如く記されていることのほか、都城に関連する考古学的調査によっても大方確認されている<sup>19)</sup>。

当時の人である西晉の陸機の『洛陽地記』および『洛陽記』によれば、魏晉の宮城は南宮と北宮によって構成されていた<sup>20)</sup>。

『水經注』および『晉書』によれば、魏晉の南宮に太極殿があった<sup>21)</sup>。ちなみに、洛陽の太極殿は曹魏の明帝の時代に始めて建てられた宮殿である。魏晉の太極殿については、宋の裴松之の『三國志』注に「わたくし裴松之が調べ考えますに、諸書には次のように記されています。……(曹魏の)明帝の時代になって始めて(後)漢の南宮の崇徳殿のあったところに太極殿や昭陽殿などが建てられました<sup>22)</sup>」とある。

したがって、魏晉の宮城は後漢と同じく南宮と北宮により構成されていたらしく、魏晉の南宮は後漢の南宮と同位置にあったらしいので、北宮もおそらく同じであったと想像されないこともない。また、そのように考えると、魏晉の宮城は後漢に同じであったと思われたいこともない。以上により、魏晉の洛陽は後漢の洛陽をほぼそのまま継承したものに過ぎないとするのが従来の通説のようである。王仲殊氏をはじめ多くの研究者が大体この説を採っている<sup>23)</sup>。

しかしながら、以上をよく見ると、魏晉の宮城と後漢の宮城の位置関係は必ずしも明確ではなく、さらに検討の余地がありそうである。この点を以下に詳しく検討して見ようと思うが、実際、通説とは異なる見解がこれまでになかったわけではない。たとえば、楊守敬氏および郭湖生氏の復元図はその例である（図2，5）<sup>24)</sup>。また、古い資料としていわゆる『元河南志圖』があげられる（図6，7）<sup>25)</sup>。この点について結論をさきにいっておけば、楊氏の復元図は魏晉

魏晉洛陽都城制度攷（外村）

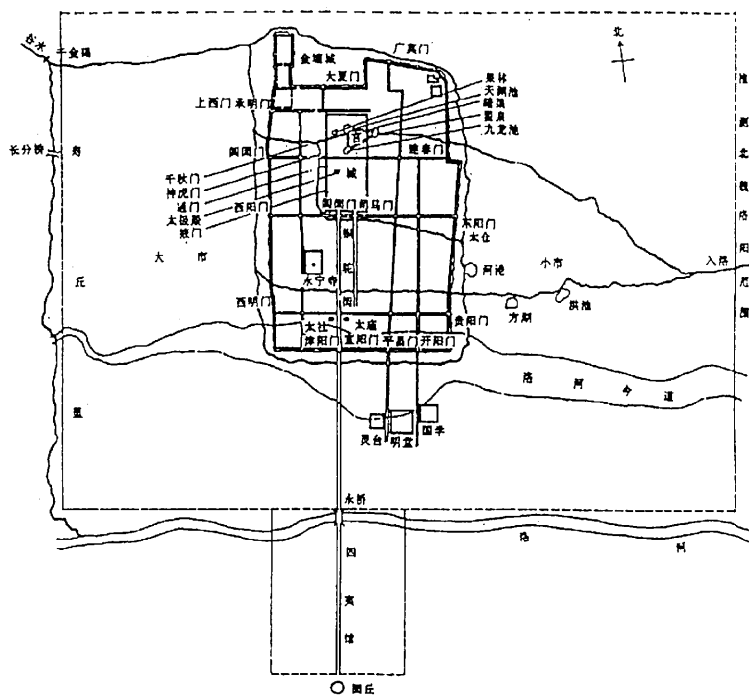


图5 郭湖生，北魏洛陽圖

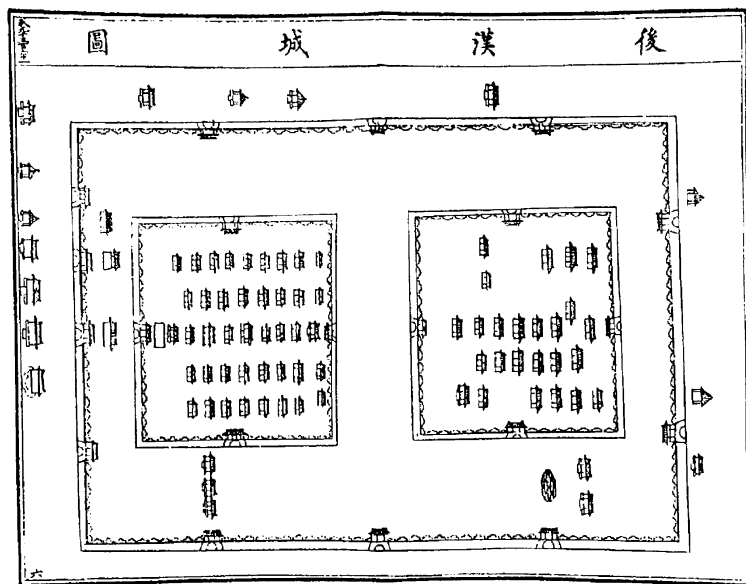


图6 後漢城圖（『永樂大典』）

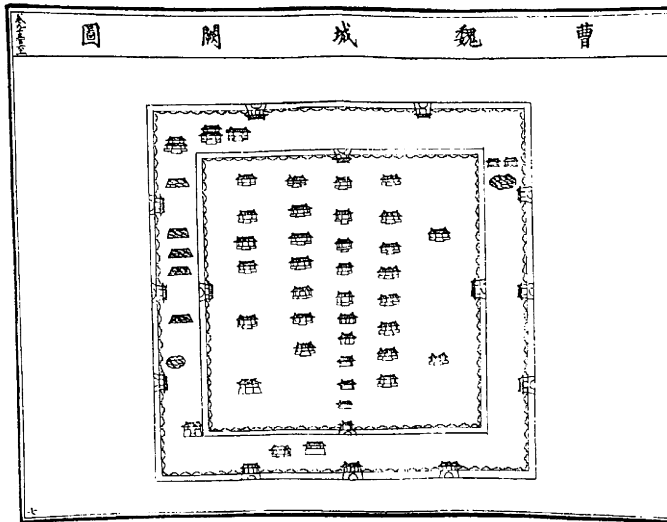


図7 曹魏城闕図（『永樂大典』）

の復元図としてなら従来の通説よりも適切なものとしてあげられそうである。また、郭氏の復元図は従来の通説に対する詳しい批判研究の成果として特筆されるべきものであるが、惜しむらくは華林園と翟泉（故狄泉）の位置に問題がありそうである。また、『元河南志圖』は、これまで都城制度の議論においてとくに取り上げられることはなかったが、早くに魏晉の洛陽は後漢とは大いに異なる構造をもつ都市であったとする見解を示しており驚かされる。

### （3）裴松之の注

従来の通説において、魏晉の洛陽は後漢に同じであったとする根拠にされてきたのが、先で見た『三國志』裴松之注の内容である<sup>26)</sup>。実は、これまでこれにそのまましたがったため、大きな誤解が生じていたようである。裴松之の注は、魏晉の南宮の太極殿は後漢の「南宮」の崇徳殿の地に建てられたとする。しかしながら、どうもこれは彼の勘違いで、実際には魏晉の太極殿は後漢の南宮ではなく「北宮」の崇徳殿の地に建てられていたようである。以下にそのように考えられる理由を整理するが、その前に次の点には注意しておきたい。魏晉の宮城が後漢に同じであった可能性を明示する資料は、実のところ魏晉の「南宮」の太極殿は後漢の「南宮」の崇徳殿の地に建てられたと明記する裴松之の注のみである。裴松之の注がなければ、魏晉の南宮は後漢の南宮とは異なる地にあった可能性が考えられる。また、裴松之の注は、歴史記録をそのまま引用したものではなく、諸書の記すところを彼が解釈しまとめたものである可能性がある点も見落としてはならないであろう。筆者は、裴松之の解釈に誤りがあったと考え

ている<sup>27)</sup>。

まず、後漢の崇徳殿は徳陽殿と東西に並んでいたようで<sup>28)</sup>、「東京賦」薛綜注によれば、崇徳殿は東に、徳陽殿は西にあり、両殿は五十歩離れていたといわれる<sup>29)</sup>。

また、『後漢書』によれば、徳陽殿は後漢の北宮にあったようである<sup>30)</sup>。

したがって、崇徳殿も北宮にあったらしいことになるのである。

一方、崇徳殿は東ではなく西にあったことを示す資料もある。すなわち、崇賢門は東の門でその内に徳陽殿があり、金商門は西の門でその内に崇徳殿があったことを示す資料が見られる<sup>31)</sup>。この点については、どちらが正しいか正確には分からないが、「東京賦」によれば、崇賢門と金商門はどちらも後漢の北宮の門であったように考えられるので<sup>32)</sup>、いずれにせよ崇徳殿が北宮にあったらしいことには変わりはない。

以上により、裴松之の注には問題があり、魏晉の南宮の太極殿は、後漢の「南宮」ではなく後漢の「北宮」の崇徳殿の地に建てられていたらしいことが理解されよう。したがって、魏晉の南宮は、後漢の南宮ではなく後漢の北宮の地にあったらしいことになり、魏晉の洛陽が後漢に同じであったとはいえなくなってしまうのである。なお、裴松之の注にそのままたがえば、崇徳殿は太極殿や昭陽殿などより大型の宮殿であったとも解釈されるが、崇徳殿がそれほどまでに大型の建築であったことを裏付ける資料は見当たらないので、そうではなかったであろう。

#### （４）後漢北宮の徳陽殿と朱雀門

以上で、後漢の北宮には崇徳殿と徳陽殿があったことを確認したが、以下に見るように、とくに徳陽殿は後漢の宮城の代表的な建築であり、また、北宮南壁にあった朱雀門は宮城の代表的な門であったようである。

まず、『後漢書』劉昭注に引く蔡質の『漢儀』により、徳陽殿で朝賀が行われたこと、徳陽殿と朱雀門が宮城を象徴するようなものであったことが理解される<sup>33)</sup>。

後漢の李尤の「徳陽殿銘」では、徳陽殿が天を象徴するものごとく扱われている<sup>34)</sup>。

陳の徐陵の「太極殿銘」では、後漢の徳陽殿が南朝建康の太極殿と対比されるものとしてあげられている<sup>35)</sup>。

『文館詞林』に引く曹魏の曹植の「毀鄴城故殿令」によれば、後漢の徳陽殿と朱雀門は曹魏の頃に壊され、それに対して、新たに太極殿と閭闔門が建てられたといわれる<sup>36)</sup>。これも、徳陽殿と朱雀門が後漢を代表するものであったことを示す資料としてあげられよう。なお、「毀鄴城故殿令」は曹植の文章ではないかもしれない。というのは、曹植は太和六年（232）に亡くなったが、一方、魏晉の太極殿は青龍三年（235）に建てられたものであるからである。しかしながら、『文館詞林』は唐代の文献なので、以上の伝えは早くからあったようである。また、『後漢書』により、朱雀門は後漢の北宮の南壁にあったこと<sup>37)</sup>、北宮の徳陽殿は、正確な

時期は分からないが、後漢の明帝によって大方永平三年（60）から永平八年（65）頃に造成されたものであるらしいことが知られる<sup>38)</sup>。

## 二、魏晉洛陽の特徴

### （1）魏晉南宮の太極殿と閭闔門

以上のように、後漢では北宮に宮城を代表するような建築と門があったことに対して、魏晉では南宮に宮城を代表する建築と門があった。この点は、魏晉の太極殿と閭闔門が魏晉の南宮にあったことにより知られる。また、この点は魏晉の洛陽が後漢の洛陽とは大きく異なっていた点のひとつとしてあげられよう。

まず、『水經注』により、魏晉の南宮に太極殿と閭闔門があったことが知られるが<sup>39)</sup>、とくに太極（宇宙の根元）を象徴するものであったといわれるから、魏晉の太極殿が宮城を代表する建築であったことはいうまでもないであろう。

魏晉の正殿である太極殿の名称は魏晉以降も帝都の正殿の名称として採用されたことは、すでに『初學記』に指摘されているとおりである<sup>40)</sup>。

『三國志』によれば、魏晉の太極殿は曹魏の明帝によって青龍三年（235）に建てられた<sup>41)</sup>。

『三國志』には、閭闔門が朝貢する者を迎える門として利用できることが記されているが<sup>42)</sup>、これは曹魏の明帝の南宮造成に関わる資料であるから、これによっても、閭闔門が南宮にあったことが理解されよう。

魏晉の閭闔門が宮城の代表的な門であったことは、たとえば陸機の「贈馮文罽遷斥丘令」に天子の象徴として宮城の閭闔門が、太子の象徴として東宮の承華門があげられていることから明らかであろう<sup>43)</sup>。

『三國志』裴松之注には「閭闔門などの門」とあり、閭闔門が宮城の代表的な門として扱われている<sup>44)</sup>。

また、考古学的調査の結果、北魏の宮城正門である閭闔門は、魏晉の門の基礎の上に造られていたことが明らかになっている<sup>45)</sup>。これは、北魏の閭闔門が魏晉の閭闔門を継承したものであることを示す『水經注』の内容に符合するものである<sup>46)</sup>。すでに銭国祥氏が魏晉の閭闔門と北魏の閭闔門は同位置にあったと主張しているが<sup>47)</sup>、そのとおりであろう。なお、魏晉の宮城の閭闔門は、魏晉の太極殿と北魏の太極殿の位置関係を考える上で重要である。魏晉の閭闔門は当時の代表的な門であり、太極殿は当時の代表的な建築であったわけであるから、魏晉の太極殿は魏晉の閭闔門の内であったと考えてよいであろう。そうであれば、魏晉の太極殿は北魏の閭闔門の内に位置していたらしい北魏の太極殿と同位置にあったと考えてよいであろう<sup>48)</sup>。



## （2）魏晉の太極殿と後漢の德陽殿の位置関係

先で見たところによれば、魏晉の太極殿は後漢の崇徳殿の地に建てられたものとされるが、そうではなく後漢の德陽殿の地に建てられた可能性もありそうである。というのは、まず、『後漢書』に引く『洛陽記』のように、崇徳殿と太極殿が同時に存在していたことを示す資料が見られるからである<sup>49)</sup>。もちろん、この崇徳殿は後漢の崇徳殿ではなく魏晉の頃に新たに建てられたものと解釈することもできるかもしれないが、先に取り上げた曹植の「毀鄴城故殿令」によれば、魏晉の太極殿は後漢の崇徳殿ではなく德陽殿の地に建てられた可能性もありそうである。すなわち、「毀鄴城故殿令」の内容は、後漢の德陽殿と朱雀門の地に、魏晉の太極殿と閭闔門が建てられたと解釈することも可能である。また、「東京賦」薛綜注のように、德陽殿が西に位置していたことを示す資料もある<sup>50)</sup>。さらには、以下で見ると、魏晉の南宮は北魏の宮城の南部に同じと思われ、魏晉の宮城の閭闔門の位置から見て、魏晉の太極殿は北魏の太極殿と同位置すなわち宮城の内西よりに位置していたように思われるが、この点はあるいは德陽殿が西に位置していたことに関わりがあるかもしれない。すなわち、後漢の德陽殿の地に魏晉の太極殿が建てられ、そしてそこに北魏の太極殿が建てられた可能性もありそうである<sup>51)</sup>。今後の発掘調査を見守りたい。

## （3）魏晉の太極殿と朝堂

魏晉の宮城は、太極殿を西に、朝堂を東に配置する構成であったようである。

まず、『三國志』によれば、西掖門（宮城西門）を通過して太極殿の東堂に至ったといわれるので<sup>52)</sup>、太極殿は宮城の内西よりに位置していたと思われる。

一方、『晉書』によれば、朝堂から東掖門（宮城東門）へ進んだといわれるので<sup>53)</sup>、朝堂は宮城の内東よりにあったようである。

ちなみに、このような構成をとる宮城は、南朝の建康、北魏の洛陽でも確認され、北齊の鄴でも同様であった可能性のあることが指摘されている<sup>54)</sup>。一方、北周の長安と隋唐の長安では、同様ではなかったようである。したがって、太極殿を西に、朝堂を東に配置する宮城をもつ点は、魏晉南北朝（とくに洛陽および建康が帝都であった時代）の帝都の特徴のひとつにあげられよう。

## （4）魏晉の太極殿と東西堂

魏晉の洛陽において、曹魏の明帝による太極殿造成にあわせて太極殿の東西に堂を配置する、いわゆる太極殿東西二堂形式がはじめて成立したようである。

まず、『三國志』には、「太極東堂」とあるので、太極殿の東堂の存在が確認される<sup>55)</sup>。

一方、魏晉の太極殿の西堂を記録する資料は見当たらないが、後の時代の太極殿には東西に

堂が配置されていることのほか、山謙之の『丹陽記』によれば、曹魏の明帝が建てた皇后の正殿である昭陽殿（後に西晉の文帝の諱を避けて顯陽殿に改めらる）にも東西に堂が配置されており、また、東西堂の制度は曹魏の制であったといわれるので<sup>56)</sup>、曹魏の明帝の太極殿にも東西に堂が配置されていたように思われる。

ちなみに、この形式は南朝の建康にも北魏の洛陽にも継承されていたことがすでに確認されており、また、北齊の鄴もこの形式を採用していたらしいことが明らかになっている<sup>57)</sup>。また、西魏の長安については不明であるが、北周の長安以降においてはまったくこの形式はとられていないこともすでに指摘されている<sup>58)</sup>。したがって、太極殿東西二堂形式が採られている点は、魏晉南北朝の帝都の特徴のひとつにあげられよう。

### （5）魏晉の華林園

魏晉の華林園は、基本的には曹魏の明帝の頃に完成した王朝を最も代表する園林で、天淵池と景陽山によって構成され、宮城内北部に位置していたようである<sup>59)</sup>。

まず、『三國志』によれば、曹魏の文帝は黄初五年（224）に天淵池を穿った<sup>60)</sup>。

『三國志』裴松之注などによれば、曹魏の明帝は景初元年（237）に景陽山を築いた<sup>61)</sup>。この頃、園林は芳林園と呼ばれていたが、後には、『三國志』裴松之注にいうように、曹魏の齊王芳が即位したので、その諱を避けて華林園と呼ばれるようになったようである<sup>62)</sup>。

ちなみに、天淵池と景陽山によって構成された華林園は、南朝の建康および北魏の洛陽においても確認される<sup>63)</sup>。したがって、王朝を最も代表する園林として華林園を有する点は、魏晉南北朝の帝都の特徴のひとつにあげられよう。なお、魏晉の華林園の詳しい位置については、以下の「宮城北」で検討する。

## 三、魏晉洛陽の構成

魏晉洛陽の復元概念図を作成してみると、図8のようになる。結果的には、おおよそ楊守敬氏が示した図のようになる（図2）。以下に復元にあたりもとづいた情報を整理してみよう。

### 三の一、宮城

#### （1）宮城

魏晉の宮城は、図8のように宮城主要部（南宮と北宮）と華林園によって構成されていたようである。宮城の規模は、正確には分からないが、その周囲の状況を検討することにより、ある程度理解されそうである。以下に見るように、魏晉の宮城の規模は、華林園を除けば大方北魏の宮城と同じであったようである。したがって、考古学的調査の成果を参考にすると、さら

魏晉洛陽都城制度攷（外村）

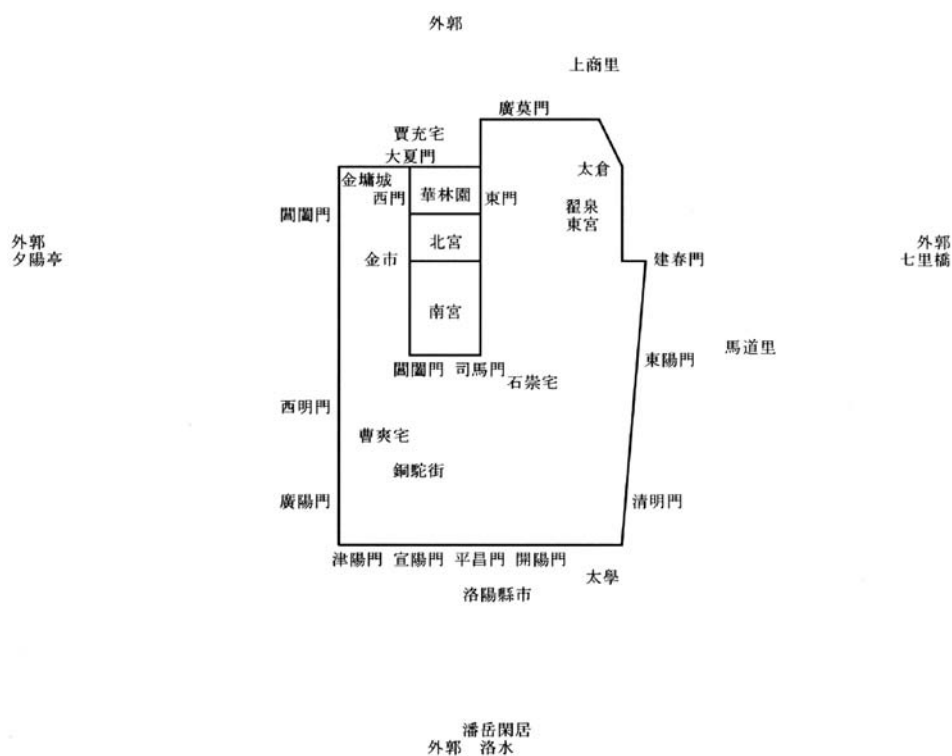


図8 筆者、魏晉洛陽復元概念図

に東に大きくなる可能性もあるが、宮城主要部は東西一里半、南北三里、華林園は東西一里半、南北一里ほどであったらしい<sup>64)</sup>。また、魏晉の洛陽の宮城主要部は、都城の中ほどにあった。この点は、南朝の建康、北魏の洛陽、北齊の鄴と同じである<sup>65)</sup>。一方、隋唐の長安の宮城主要部は、周知のとおり都城（正確には都城に相当するもの）内北にあった。したがって、宮城主要部が都城の中ほどにある点は魏晉南北朝の帝都の特徴のひとつにあげられよう。

(2) 宮城北・華林園

魏晉の都城北壁は、宮城北壁と華林園北壁を兼ねていたらしく、魏晉の華林園は宮城内の園林であったようである。

まず、『水經注』によれば、都城北壁の大夏門のすぐ内東側、都城壁の近くに曹魏の明帝の景陽山の遺構があったといわれるので<sup>66)</sup>、華林園は少なくとも都城北壁のすぐ内にあったらしいことが知られる。したがって、たとえば、郭湖生氏の華林園の位置には問題があろう(図5)。

『水經注』によれば、北魏の華林園の東壁の内あるいは外に曹魏の明帝の聽訟觀があった<sup>67)</sup>。

陸機の『洛陽地記』および『洛陽記』によれば、聽訟觀は魏晉の宮城の内にあったといわれる<sup>68)</sup>。したがって、魏晉の華林園は宮城の内に位置していたように思われる。

また、魏晉の華林園は、宮城の内北を(図8のように)東から西まですべて占めていたらしい。そう考えられるのは、『晉書』に、華林園には東門と西門があり、それぞれの門より宮城外へ出られたことを示す記録が見られるからである<sup>69)</sup>。なお、魏晉の華林園は、場合によっては宮城の外とみなされることもあった可能性もある。実は、『晉書』の東門からの外出は西晉の趙王倫が帝位を失って宮城を去ったときのことで、西門からの外出は西晉の恵帝が帝位を奪われて宮城から追い出されたときのことである。どちらも帝位を失った者の外出であったために華林園の門が使われたようである。一方、同じく『晉書』によれば、趙王倫は即位のとき、また、恵帝は再び帝位を取り戻したあと、端門すなわち宮城門から入城している<sup>70)</sup>。したがって、華林園の東西の門は宮城門より格付けが下であったらしく、そのように見ると、華林園は宮城主要部よりは格付けが低い空間であったと考えられるので、場合によっては宮城の外とみなされることもあったかもしれない。

また、『洛陽圖經』のように、華林園は都城の内東北にあったとする資料もあるが<sup>71)</sup>、それはおそらく東宮の玄圃園との混同であろう(次の「宮城東」を参照)。

また、北魏の華林園は、『魏書』によれば、宮城北壁の後門(宮城の北門)の外北にあったらしい<sup>72)</sup>。したがって、魏晉と北魏では、宮城の構成が若干異なっていたようである。ただし、宮城の内外を問わなければ、宮城主要部より北に華林園を配置する構成は、魏晉も北魏も同じであったようである。また、南朝の建康にも華林園が造られていたが、それは宮城の内北にあったらしい<sup>73)</sup>。したがって、内外を問わなければ、宮城主要部の北に王朝を最も代表する園林であった華林園を配置する点は、魏晉南北朝の帝都の特徴のひとつにあげられよう。

### (3) 宮城東・歩廣里・東宮

魏晉の宮城東壁は、北魏の宮城東壁と大方同じであったようである。

まず、陸機の『洛陽記』によれば、歩廣里は魏晉の宮城東壁の外東にあった<sup>74)</sup>。

『宋書』によれば、歩廣里は都城の内東北にあった<sup>75)</sup>。

陸機の『洛陽記』によれば、宮城東壁の外東には西晉の東宮があった<sup>76)</sup>。

楊佺期の『洛陽記』によれば、西晉の東宮の北には玄圃園があった<sup>77)</sup>。

『水經注』によれば、玄圃園の園池は、かつての狄泉(翟泉)であった<sup>78)</sup>。

『洛陽伽藍記』によれば、狄泉の東北には西晉の太倉があった<sup>79)</sup>。

『洛陽伽藍記』および『水經注』によれば、このあたりは北魏の頃には建春門内御道の北、廣莫門内御道の東にあたり、東宮を建てる予定地や翟泉の北に河南尹の庁舎があったといわれ<sup>80)</sup>、魏晉に同じく北魏においても宮城東壁の外であったことが知られる。したがって、魏晉

の宮城東壁は北魏と大方同じであったと見てよいであろう。また、以上によれば、狄泉は北魏の廣莫門内御道の東にあったことになるので、郭湖生氏および銭国祥氏の復元図に示された狄泉（翟泉）の位置には問題があろう（図4、5）。

#### （4）宮城南・銅駝街・廟

魏晉の宮城（南宮）南壁は、北魏の宮城南壁と同じであったようである。

まず、『水經注』および陸機の『洛陽記』によれば、魏晉の宮城南壁の閭闔門の南には銅駝街があった<sup>81)</sup>。

陸機の『洛陽記』によれば、魏晉の宮城南壁の外南に十字路があったといわれるので<sup>82)</sup>、魏晉の宮城は都城南壁から離れていたようである。

『水經注』によれば、北魏の宮城南壁の外南、都城南壁の内北に魏晉の廟があった<sup>83)</sup>。

『晉書』によれば、西晉の廟は、都城南壁の宣陽門の内北にあった<sup>84)</sup>。また、『建康實録』原注には、東晉の頃、建康の宮城南壁の外南、都城南壁の内北に、魏晉洛陽に倣って廟を築こうとしたという記録が見られる<sup>85)</sup>。したがって、魏晉の洛陽の宮城南壁の外南、都城南壁の内北に魏晉の廟があったことが知られ、魏晉の宮城南壁は都城南壁から離れていたことが知られる。

陸機の『洛陽記』によれば、魏晉の太學は宮城から八里にあったといわれるが<sup>86)</sup>、かりに魏晉の宮城が後漢の南宮の位置にあったとしたら、諸書の示すところから判断するに、八里では遠すぎる。一方、魏晉の宮城南壁が北魏の宮城南壁と同じであったとすれば問題はない。

『水經注』は、北魏の宮城南壁の閭闔門はもとはといえば曹魏の明帝が造ったものであったとする<sup>87)</sup>。一方、近年の考古学的調査により、北魏の閭闔門は魏晉の門の基礎上に造られたものであることが確認されている<sup>88)</sup>。これは、『水經注』の内容が正しいことを示すものといえよう（先述「魏晉南宮の太極殿と閭闔門」を参照）。

以上により、魏晉の宮城南壁は北魏と同じであったらしいことが知られよう。

#### （5）宮城西・金市

魏晉の宮城西壁は、その外西に金市があり大方北魏の宮城西壁と同じであったようである。戴延之の『西征記』によれば、魏晉の宮城西壁の外西、都城西壁の内東に金市があった<sup>89)</sup>。一方、『洛陽伽藍記』および『水經注』によれば、西晉の金市の地は北魏の宮城西壁の外西に当たるといわれる<sup>90)</sup>。

#### （6）魏晉の南宮と北宮の位置関係（考古二分線）

魏晉の宮城を構成した南宮と北宮の境は、正確には分からないが、あるいは、考古学的調査によって確認された北魏の宮城の二分線と同じあるいはその付近にあったように思われる

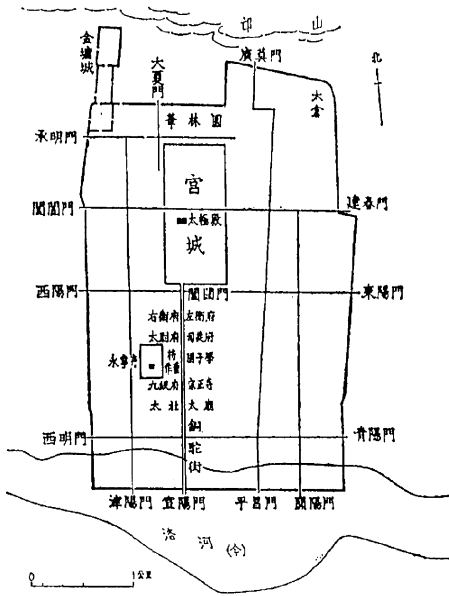


図9 王仲殊，北魏洛陽平面図

(図9)<sup>91)</sup>。この考古二分線は、北魏の都城西壁の閶闔門から北魏の宮城西壁の千秋門を通り宮城を南と北に二分して都城東壁の建春門に至る線である。

まず、『三國志』裴松之注によれば、魏晉の洛陽には先に北宮があり、そこに建始殿があり、後に南宮が造られたようである<sup>92)</sup>。また、『三國志』には、曹魏の明帝による南宮の造成を諫めた文章のなかに、すでに建始殿、崇華殿、華林園の天淵池があるので充分ではないかとする内容が見られる<sup>93)</sup>。これは、建始殿、崇華殿、華林園が当時の北宮あるいはその付近にあったことを示すものであろう。ちなみに、『後漢書』劉昭注に引く『魏志』によれば、建始殿は曹魏の武帝曹操が建てたといわれる<sup>94)</sup>。また、『三國志』によれば、

建始殿は曹魏の文帝も利用していた<sup>95)</sup>。

『後漢書』李賢注に引く『洛陽記』よれば、建始殿は西晉の太倉の西にあった<sup>96)</sup>。

『洛陽伽藍記』によれば、西晉の太倉は、北魏の建春門内御道すなわち考古二分線の北にあったといわれる<sup>97)</sup>。したがって、建始殿も考古二分線の北にあったと考えられよう。

『三國志』によれば、魏晉の崇華殿は、後に九龍殿と改称された<sup>98)</sup>。この九龍殿は、明確な記録は見あたらないが、北魏の九龍殿と同位置にあったようである。というのは、北魏の九龍殿の近くにあった凌雲臺は曹魏の文帝の凌雲臺を継承したものであったことが『洛陽伽藍記』により知られ<sup>99)</sup>、また、曹魏の九龍殿の前にあったと思われる九龍池が靈芝池とともに北魏に継承されたらしいことが『三國志』裴松之注に引く『魏略』および『水經注』より察せられるからである<sup>100)</sup>。また、『洛陽伽藍記』によれば、北魏の九龍殿(おそらくも曹魏の崇華殿)は、北魏の宮城西壁の千秋門内路すなわち考古二分線の北にあったことが知られる<sup>101)</sup>。

また、先の「宮城北」で見たように魏晉の華林園は宮城北壁のすぐ内南に位置していたようである。

以上のように、曹魏の明帝が南宮を造成する以前に利用されていた代表的な施設である建始殿、崇華殿、華林園が考古二分線の北に位置する点は、曹魏の北宮が考古二分線の北にあったことを示しているのではなかろうか。また、そのように見ると、魏晉の宮城は、華林園を除けば大方北魏の宮城と同じであったように思われる。

### 三の二、都城

#### （1）魏晉の都城の規模

洛陽の都城は、『元河南志』によれば、俗に東西六里、南北九里であったといわれ「九六城」と呼ばれていたことが知られる<sup>102)</sup>。また、それに関わると思われる『帝王世紀』および『晉元康地道記』のような資料も見られる<sup>103)</sup>。一方、『晉書』原注によれば、魏晉の頃には正式には「九六」ではなく東西七里、南北九里と考えられていたようであるが<sup>104)</sup>、それは都城東壁に若干の張り出し部があるので、それを一里と見て東西七里としたものではなかろうか。なお、陸機の『洛陽記』は、「東西十里。南北十三里」とするが、それは都城外の規模を記したものであろう<sup>105)</sup>。というのは、陸機の『洛陽記』には「南北九里」とする内容も見られるからである<sup>106)</sup>。すなわち、南北九里は都城の内で、南北十三里は都城の外を示したものであろう。ただし、その差についての詳しいところは後考を待ちたい。

#### （2）都城内居住区

魏晉の都城内には一部に居住区があった。都城内に居住区があったことは、魏晉以前の帝都においても、また、南朝の建康、北魏の洛陽、北齊の鄴においても同じであった<sup>107)</sup>。一方、隋唐の長安では都城内にまったく居住区はなかった。したがって、都城内に居住区がある点は、魏晉南北朝あるいはその頃までの帝都の特徴のひとつにあげられよう。ちなみに、魏晉の都城内に居住区があったことを示す資料としては、たとえば北魏の永寧寺が曹魏の曹爽の故宅の地に建てられたものであったとする『水經注』の記録があげられる<sup>108)</sup>。また、『洛陽伽藍記』によれば、西晉の石崇の邸宅も都城内にあったといわれる<sup>109)</sup>。

#### （3）都城十二門

陸機の『洛陽記』によれば、魏晉の都城門は十二門あった<sup>110)</sup>。『晉書』原注も十二門あったとし、東壁には建春門、東陽門、清明門の三門が、南壁には開陽門、平昌門、宣陽門、建陽門の四門が、西壁に廣陽門、西明門、閭闔門の三門が、北壁には大夏門、廣莫門の二門があったとする<sup>111)</sup>。

都城門については、『洛陽伽藍記』序に詳しいが、北魏の都城門の位置から魏晉の都城門の位置を考える場合、たとえば『水經注』によれば、以下に見るように、北魏は幾つかの都城門を移動させたといわれるので注意しておく必要がある<sup>112)</sup>。

##### ① 都城北壁二門

魏晉の都城北壁には西から大夏門、廣莫門の二門があったことが、文献学的にも考古学的にも確認されている<sup>113)</sup>。



② 都城東壁三門

魏晉の都城東壁には北から建春門、東陽門、清明門の三門があったことが、同じく確認されている。

③ 都城南壁四門

『洛陽伽藍記』序によれば、魏晉の都城南壁には西から津陽門、宣陽門、平昌門、開陽門の四門があったといわれるが、都城南壁はすでに洛水（洛河）に流されており、考古学的には確認できないようである。

ところで、従来の通説では、後漢の平城門（平門）と魏晉の平昌門と北魏の平昌門は同位置にあったと考えられている（図1）<sup>114</sup>。これに対して、水野清一氏は、後漢の平城門と魏晉の平昌門は同位置ではなく、魏晉の平昌門は魏晉の頃に後漢の平城門より東に新たに開かれた門であり、それを北魏が継承したらしいことを指摘している<sup>115</sup>。後漢の平城門の東に新たに門が開かれたらしいとする点は、筆者も同感である。しかしながら、それでは都城南壁には五門あったことになり、『洛陽伽藍記』序および『晉書』原注が四門とする点に符合しない。思うに、後漢から北魏までの都城南壁の門の配置は、あるいは次のように変化したのではなかろうか。

後漢の都城門

津門。 小苑門。 平城門。 （未開） 開陽門。

魏晉の都城門

津陽門。 宣陽門。 平昌門。 開陽門。 （塞）

北魏の都城門

津陽門。 宣陽門。 （塞） 平昌門。 開陽門。

まず、『後漢書』によれば、後漢の都城南壁には西から津門、小苑門、平城門、開陽門の四門があったといわれる<sup>116</sup>。『晉書』原注によれば、魏晉の都城南壁には、建陽門、宣陽門、平昌門、開陽門の四門があったといわれる<sup>117</sup>。建陽門は『洛陽伽藍記』序にいう津陽門のことである<sup>118</sup>。

そして、ここで注目したいのが、西晉の陸機が『洛陽記』で後漢の開陽門を「故開陽門」と呼んでいる点である<sup>119</sup>。これは、後漢の開陽門は魏晉には継承されず塞がれ、魏晉の頃には新たな開陽門が開かれていたことを示すものではなかろうか。

『洛陽伽藍記』序によれば、魏晉の平昌門は後漢の平門を継承したものとされる<sup>120</sup>。李尤の「平城門銘」によれば、後漢の平門は、後漢の平城門のことである<sup>121</sup>。

『水經注』によれば、後漢の平城門は、北魏の頃には塞がれていた<sup>122</sup>。

以上にもとづけば、先に示したように都城門の配置は変化したように考えることができよう。したがって、『水經注』が後漢の平門と北魏の平昌門を同位置とし<sup>123</sup>、『洛陽伽藍記』が後漢



の平門と魏晉の平昌門と北魏の平昌門を同位置とするのはともに誤りで<sup>124)</sup>、実のところは後漢の平門（平城門）は魏晉の頃に平昌門に改められ、それは北魏の頃に塞がれたように思われるのである。

また、『水經注』は北魏の頃に宣陽門は移されたとするが<sup>125)</sup>、おそらくそうではなく北魏の宣陽門は魏晉の宣陽門を継承したもののように思われる。というのは、陸機の『洛陽記』によれば、西晉の宣陽門内に西晉の氷室があったといわれるが<sup>126)</sup>、同様に『洛陽伽藍記』にも北魏の宣陽門内に西晉の氷室があったと記されているからである<sup>127)</sup>。

#### ④ 都城西壁三門

魏晉の都城西壁には北から閭闔門、西明門、廣陽門の三門があった。『水經注』によれば、魏晉の閭闔門は南へ、西明門は北へ北魏の遷都の頃に移されたといわれる<sup>128)</sup>。なお、魏晉の都城の閭闔門の位置は確認されていないようであるが、西明門の位置は考古学的に確認されている<sup>129)</sup>。

### 三の三、外郭

魏晉の洛陽の外郭については、外郭壁の存在は不明であるが、少なくとも外郭内居住区あるいはそれに相当するものがあり、それが都城の周囲を取り巻いていたようである。とくに都城北壁の外北にも居住区があったことは注目されよう。というのは、南朝の建康においても北魏の洛陽においても都城北壁の外北に居住区があったが、一方、隋唐の長安では都城北壁が外郭北壁を兼ねていたため居住区は存在しなかったからである<sup>130)</sup>。したがって、外郭内居住区が都城を取り巻いていた点は、魏晉南北朝あるいはその頃までの帝都の特徴のひとつにあげられよう。なお、魏晉の外郭の規模は、以下に見るように、正確なところは分からないが、大方洛水以北の北魏の外郭（外郭内居住区）に同じく東西二十里、南北十五里ほどあったように思われる。北魏の外郭の考古学的調査の成果が参考になろう<sup>131)</sup>。ちなみに、『洛陽伽藍記』によれば、北魏の京師は東西二十里、南北十五里あったといわれる<sup>132)</sup>。また、楊寬氏の研究などによれば、洛陽の外郭は、洛水以北で見た場合、後漢から魏晉そして北魏においても大方同規模であったようである<sup>133)</sup>。

#### (1) 都城外北

『水經注』によれば、都城北壁の外北に西晉の賈充の邸宅があった<sup>134)</sup>。陸機の『洛陽記』によれば、都城北壁の外東北には上商里があった<sup>135)</sup>。以上により、都城北壁の外北に居住区があったことが知られる。

北郭の規模については、資料が少なく、また、都城北壁の外北は山の斜面に近く<sup>136)</sup>、北魏になって新たに大規模な造成が行われたとは思われないので、規模は大方北魏と同じであった

のではなかろうか。ちなみに、北魏の北郭壁は、都城北壁から最短で850メートルのところで確認されている。これは二里の距離と見てよいであろう<sup>137)</sup>。したがって、これによれば、一里は425メートルということになる。

### (2) 都城外東

『洛陽伽藍記』および戴延之の『西征記』によれば、魏晉の都城東壁の外東には、馬道里があり、蜀主劉禪や呉王孫皓の邸宅があったといわれる<sup>138)</sup>。

陸機の『洛陽記』によれば、市もあった<sup>139)</sup>。ちなみに、魏晉の頃、外郭内には都城東壁の外東と都城南壁の外南の二カ所に市があった。

東郭の規模については、『洛陽伽藍記』によれば、北魏の郭門は七里橋の東一里にあり、北魏の頃には郭門で送迎が行われていたといわれる<sup>140)</sup>。一方、『洛陽伽藍記』および『世説新語』によれば、西晉の頃、餞別の宴が七里橋で催されていた<sup>141)</sup>。したがって、魏晉の郭門に相当するものは、おおよそ七里橋付近にあったように思われる。北魏の東郭壁は、都城東壁から最短距離で3500メートルのところで確認されている。これは、一里425メートルとすると、八里強の距離である。七里橋はその西一里にあったことになる。なお、北魏の東郭壁は外郭内居住区のすぐ外に築かれたものであったかどうかは現在のところ不明である。

### (3) 都城外南

陸機の『洛陽記』によれば、魏晉の都城南壁の外南に市（洛陽縣市）があり、その市は洛陽縣の役所の地にあったといわれる<sup>142)</sup>。市があり縣の役所があったのであるから、居住区もあったと考えてよいであろう。

西晉の潘岳は「閑居賦」で彼の邸宅は「後市（北に市がある）」といているが、その市とは洛陽縣市のことであろう<sup>143)</sup>。

南郭の規模については、潘岳は「閑居賦」で「洛之涘（都城南壁の外南を流れる洛水のほとり）」にあったという彼の宅について「面郊（南に郊外が広がっている）」といているので、洛水が南郭壁に相当し、その北が郊の内すなわち南郭の内であったように思われる。なお、『洛陽伽藍記』によれば、北魏の頃の状況ではあるが、都城南壁の宣陽門の外南四里に洛水があったといわれる<sup>144)</sup>。

### (4) 都城外西

『三國志』裴松之注によれば、曹操の頃であるが、都城西壁の外西に趙忠の邸宅があったといわれる<sup>145)</sup>。

西郭の規模については、『洛陽伽藍記』によれば、北魏の張方橋は漢の夕陽亭のあたりにあり、そこは北魏の頃送迎の場であったといわれる<sup>146)</sup>。また、『晉書』によれば、西晉の頃、夕陽亭で送別が行われているので<sup>147)</sup>、魏晉の郭門に相当するものも、そのあたりにあったように思われる。なお、『洛陽伽藍記』によれば、張方橋は都城西壁の閭闔門の外西七里にあったといわれる<sup>148)</sup>。

#### 四、銭国祥氏の新説について

銭国祥氏の研究は、洛陽の都城制度に関わる研究史上、特筆されるべき研究である<sup>149)</sup>。というのは、その説は従來の通説に対して、北魏の閭闔門の考古学的調査の成果と独自の文献学的研究により、魏晉の宮城正門である閭闔門の地に北魏の宮城正門である閭闔門が造られたとし、後漢の北宮の地に魏晉の宮城そして北魏の宮城が造られたとする全く新たな説であるからである。小稿は銭氏とは異なる分析の方法を採ったが、多くは銭氏の結論と同じである。したがって、銭氏の説に大いに賛同するが、そのままでは首肯しかねる点がないではない。ここでは、銭氏の説に対して、現在のところ、とくに疑問と思われる点を指摘しておきたい。

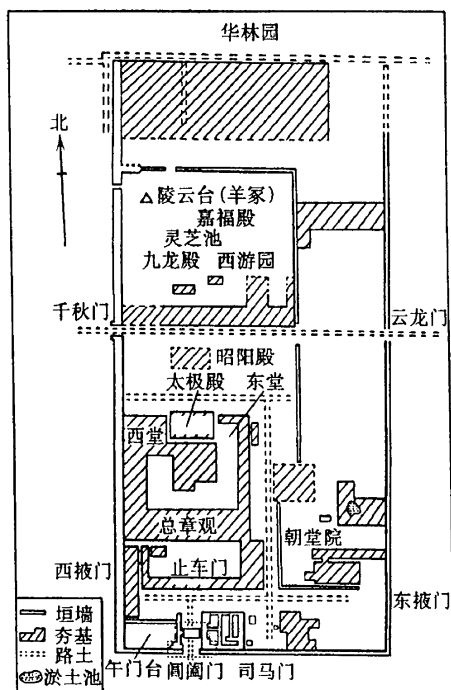


図10 銭国祥、魏晉北魏洛陽宮城平面布局勘探復原示意图

銭氏は、後漢の北宮の朱雀門の地すなわち魏晉および北魏の南宮南壁の中央に司馬門が造られたとする。そして、曹魏の明帝による司馬門の造成時に、造成中の闕が壊れたので、司馬門より西に新たな宮城正門として閭闔門が開かれたとする。

以上に対して、筆者は次のように考える。魏晉の宮城は、先で見たように西に太極殿、東に朝堂を配置していたらしい。この点は曹魏の鄴や南朝の建康でも同様であり、鄴や建康ではそれぞれ中心となる建築から南に延びる線上に宮城門が開かれていたようである<sup>150)</sup>。そうであれば、司馬門は魏晉の南宮南壁の中央ではなく、銭氏が示す朝堂院の南すなわち南壁中央より東に位置していた可能性もあるのではなかろうか(図10)。ここで注意しておきたいのは、二つの門を開き二つの軸をもつ宮城は、魏晉の洛陽に

先行する曹魏の鄴においてすでに造られていたという点である。あるいは、宮城南壁に二つの門が開かれたのは、闕の崩壊が原因ではなく、鄴で採られた二軸制が魏晉の洛陽でも採用されたためと考えることもできるのではなかろうか。現在のところ、この点を無視してしまうことは出来ないであろう。宮城南壁の閭闔門より東の部分の考古学的調査が行われることを期待したい。

### お わ り に

小稿では、魏晉の帝都洛陽の特徴を検討した。その結果、図8のような復元概念図を得るに至った。魏晉の洛陽の外郭は、正確には分からないものの、大方洛水以北の北魏の外郭（外郭内居住区）と同じであったらしく、その多くはすでに後漢の頃に造られていたようである<sup>151)</sup>。また、魏晉の都城は、金墉城を除けば、北魏と同じく後漢の都城を継承したものである。一方、魏晉の宮城は、後漢を継承したものではなく後漢とは大いに異なる構造をとり、大方北魏と同じであったらしい。以上は見方を変えれば、北魏の洛陽は大方魏晉の洛陽を基礎とするものであったといえるであろう。

従来の通説の根拠とされてきたのが宋の裴松之の『三國志』注である。それによれば、魏晉の南宮の太極殿は後漢の「南宮」の崇徳殿の地に建てられたとされる。しかしながら、実はそうではなく後漢の「北宮」の崇徳殿の地に建てられたようである。すなわち魏晉の南宮は後漢の北宮の地にあったらしい。したがって、従来の通説は裴松之の注にもとづき魏晉の洛陽は後漢を継承したものに過ぎないとするが、どうやらそうではなかったようである。なお、魏晉の太極殿は崇徳殿の地ではなく徳陽殿の地に建てられた可能性もある。

魏晉の洛陽は、曹魏の明帝による太極殿をはじめとする南宮の造成および景陽山の建設による華林園の完成などにより大方できあがったが、その主要な制度は後漢の洛陽とも隋唐の長安とも大いに異なっていたようである。なお、これまでの復元図のなかでは、魏晉の図としては楊守敬氏の図が最も適切なものとしてあげられそうである（図2）。

魏晉の洛陽が後漢の洛陽および隋唐の長安と大きく異なっていた点としては、たとえば次があげられよう。それらがいずれも曹魏の明帝による造成に関わるものであったことは注目に値しよう<sup>152)</sup>。

- ① 魏晉の宮城の最主要部は、太極殿が建てられた南宮であった。
- ② 太極殿が西に、朝堂が東に配置されていた。
- ③ 太極殿東西二堂形式が採られていた。
- ④ 王朝を最も代表する園林として、天淵池と景陽山を主要な構成要素とする華林園が宮城主要部（南宮と北宮）の北にあった。

⑤ 宮城主要部は都城の中ほどに位置し、宮城主要部を取り囲むように都城があり、さらに都城を取り囲むように外郭があった。すなわち、宮城と都城と外郭が偏りのより少ない三重構造を採っていた。

なお、華林園を除けば、魏晉の宮城の規模は、大方北魏と同じで東西一里半、南北三里ほどあったようである。また、都城の規模は、魏晉の頃には東壁の張り出し部を一里と見なし、東西七里、南北九里と考えられていたらしい。また、魏晉の外郭の規模は、外郭壁については分からないが、外郭内居住区を見た場合、大方洛水以北の北魏に同じく東西二十里、南北十五里ほどあったようである。

以上のように、魏晉の洛陽は、とくにその主要部の制度を見るに、後漢の洛陽とも隋唐の長安とも大きく異なる構造を採っていたらしい。一方、魏晉の洛陽の制度は、魏晉南北朝の帝都の制度の規範となっていたようで、南朝の建康、北魏の洛陽に大いに継承されている。したがって、魏晉の洛陽は、制度的に見て魏晉南北朝を最も代表する帝都であったといつてよく、この点により中国の都城制度史上極めて重要な都市のひとつにあげられるべき都市である。どうもあまり知られていないようであるが、倭の女王卑弥呼の使者はそのような帝都洛陽を訪ねたのであった。

#### 注

- 1) 『三國志』卷三十「景初二年六月。倭女王遣大夫難升米等詣郡。求詣天子朝獻。太守劉夏遣吏將送詣京都。」、『梁書』卷五十四「至魏景初三年。公孫淵誅後。卑彌呼始遣使朝貢。魏以爲親魏王。假金印紫綬。」なお、景初二年あるいは三年の問題については、次を参照。金文京『三國志の世界』、講談社、2005年、316-344頁。
- 2) 従来の説の代表的な例として、たとえば次があげられる。王仲殊「論洛陽在古代中日關係史上的重要地位」『考古』7、2000年、70-80頁。王仲殊『漢代考古学概説』、中華書局、1984年。王仲殊「中国古代都城概説」『考古』5、1982年、505-515頁。その他としては注23を参照。
- 3) 大方の内容は、筆者は次にて口頭で発表したことがある。「魏晉の洛陽について」、京都大学人文科学研究所研究会、1997年4月21日。「中国中世の都城制度をたった一人で変えてしまった外国人デザイナー」、東京国立文化財研究所研究会、1998年3月25日。また、次で若干言及したことがある。拙稿「中国古代の都市と園林についての初歩的考察」『佛教藝術』272、2004年、13-33頁。
- 4) 錢国祥「由閩闔門談漢魏洛陽城宮城形制」『考古』7、2003年、53-63頁。また、魏晉南北朝の宮城の構成について、筆者とは異なる点に着目しつつほぼ同様な解釈を示すすぐれた研究として、次があげられる。渡辺信一郎「宮闕と園林」『考古学研究』186、2000年、12-28頁。ただし、渡辺氏の論考は、惜しむらくは曹魏洛陽の宮城との比較のためにあげている南朝建康の宮城の構成についての解釈に問題がありそうである。16頁で建康の都城と宮城の北壁は一致するとするが、そうではないであろう。次を参照。拙稿「六朝建康都城宮城攷」『中国技術史の研究』、

- 京都大学人文科学研究所, 1998年, 247-305頁。
- 5) 王仲殊・前掲注2, 1984年, 18頁。
  - 6) 『後漢書』志二十七「本注曰。雒陽城十二門。其正南一門曰平城門。」
  - 7) 『後漢書』志十三「靈帝光和元年。南宮平城門內屋, 武庫屋及外東垣屋前後頓壞。蔡邕對曰。平城門。正陽之門。與宮連。郊祀法駕所由從出。門之最尊者也。』、『後漢書』志二十七, 劉昭注「漢官秩曰。平城門爲宮門。」
  - 8) 『後漢書』志十三「南宮平城門內屋。」
  - 9) 『水經注』卷十六「閭闔門。漢之上西門者也。……太和遷都。徙門南側。」
  - 10) 楊守敬『水經注圖』, 文海出版社, 1967年。
  - 11) 楊守敬『水經注疏』, 江蘇古籍出版社, 1989年, 1409頁。
  - 12) Bielenstein, Hans, 'Lo-yang in Later Han Times', in: "The Museum of Far Eastern Antiquities Stockholm Bulletin" No. 48, 1976, pp. 1-142.
  - 13) 『後漢書』卷一上, 李賢注「蔡質漢典職儀曰。南宮至北宮。中央作大屋。複道三道行。天子從中道。從官夾左右。十步一衛。兩宮相去七里。」
  - 14) 錢国祥・前掲注4, 2003年。
  - 15) 『後漢書』志二十六「本注曰。濯龍亦園名。近北宮。」
  - 16) 王仲殊・前掲注2, 1984年, 21頁。
  - 17) 錢国祥・前掲注4, 2003年, 57頁。
  - 18) 『水經注』卷十六「穀水又東。逕金墉城北。魏明帝于洛陽城西北角築之。』, 陸機『洛陽記』(『說郛』司六十一)「洛陽城內西北角有金墉城。』, なお, 次によれば, 金墉城は曹魏の初期までに都城内西北角に当たる部分が造られ, 北魏以降に都城外の張り出し部分が造られたといわれる。中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊「漢魏洛陽故城金墉城址発掘簡報」『考古』3, 1999年, 1-15頁。
  - 19) 中国科学院考古研究所洛陽工作隊:「漢魏洛陽城初步勘查」『考古』4, 1973年, 198-208頁。閻文儒:「洛陽漢魏隋唐城址勘查記」『考古學報』9, 1955年, 117-136頁。
  - 20) 陸機『洛陽地記』(『太平御覽』卷百七十九)「洛陽南宮有承風觀。洛陽北宮有增喜觀。』, 陸機『洛陽記』(『說郛』司六十一)同上。
  - 21) 『水經注』卷十六「魏明帝上法太極于洛陽南宮。起太極殿于漢崇德殿之故處。……南宮既建。明帝令侍中京兆韋誕。以古篆書之。』、『晉書』卷百二「入于南宮。升太極前殿。」
  - 22) 『三國志』卷二, 裴松之注「臣松之案。諸書記。……至明帝時。始於漢南宮崇德殿處。起太極, 昭陽諸殿。」
  - 23) 王仲殊・前掲注2の他, 従來の通説を採っている例として, たとえば次があげられる。張之恒(主編)『中国考古学通論』, 南京大学出版社, 1995年。愛宕元『中国の城郭都市』中公新書1014, 中央公論社1991年。曹爾琴「洛陽從漢魏至隋唐的變遷」, 『中国古都研究』3, 1987年。楊寬『中国都城の起源と發展』, 学生社, 1987年。葉驍軍(編)『中国都城歴史図録』第二集, 蘭州大学出版社, 1986年。村田治郎『中国の帝都』, 綜芸舎, 1981年。宿白「北魏洛陽城和北邙陵墓」, 『文物』7, 1978年, 42-52頁。
  - 24) 楊守敬・前掲注10, 1967年。郭湖生「漢魏西晉北魏洛陽」『建築師』52, 1993年, 53-56頁。なお, 郭氏は, 北魏洛陽は大方魏晉のときにできあがったものであろうとするので, 図5は正確には北魏洛陽図であるが, ほぼ魏晉洛陽図とみてもよいであろう。あわせて次を参照。郭湖生「魏晉南北朝至隋唐宮室制度沿革」, 『中国古代科学史論・續篇』, 京都大学人文科学研究所, 1991



年，753－805頁。

- 25) 『元河南志圖』については、次を参照。考古研究所洛陽発掘隊「永樂大典卷9561引元河南志的古代洛陽図十四幅」、『考古学報』2，1959年，37－44頁。
- 26) 注22を参照。
- 27) 裴松之の誤りであることは、銭国祥氏も指摘するところである。銭国祥・前掲注4，2003年，60頁。
- 28) 後漢洛陽の復元研究において、崇徳殿の位置にいち早く注目したのが Bielenstein, Hans 氏の前掲論文注12である。
- 29) 後漢の張衡「東京賦」(『文選』卷三) 薛綜注「崇徳在東。徳陽在西。相去五十歩。」
- 30) 『後漢書』卷八「幸北宮徳陽殿。」
- 31) 張衡「東京賦」(『文選』卷三) 薛綜注「崇賢東門名也。金商西門名也。」、『後漢書』卷六，李賢注「漢官儀曰。崇賢門内徳陽殿也。」、『後漢書』六十下「詣金商門。引入崇徳殿。」
- 32) 張衡「東京賦」(『文選』卷三)「昭仁恵於崇賢。抗義聲於金商。」なお、「東京賦」の前後の文脈によれば、以上の句は後漢の北宮の状況を描写したもののようである。
- 33) 『後漢書』志五，劉昭注「蔡質漢儀曰。正月旦。天子幸徳陽殿。臨軒。……徳陽殿周旋容萬人。……會朝百僚於此。自到偃師。去宮四十三里。望朱雀五闕，徳陽。其上鬱律與天連。」
- 34) 後漢の李尤「徳陽殿銘」(『藝文類聚』卷六十二)「皇穹垂象。以示帝王。紫微之則。弘誕彌光。大漢體天。承以德陽。……」
- 35) 陳の徐陵「太極殿銘」(『藝文類聚』卷六十二)「……偃師迴顧。崔嵬徳陽。……」
- 36) 曹魏の曹植「毀鄴城故殿令」(『文館詞林』卷六百九十五)「大魏龍興。隻人尺土。非復漢有。是以咸陽則魏之西都。伊洛爲魏之東京。故夷朱雀而樹閭闔，平徳陽而建泰極。」なお、曹植については、次を参照。『三國志』卷十九「黃初二年。……其年改封鄴城侯。三年。立爲鄴城王。……四年。徙封雍丘王。」
- 37) 『後漢書』志二十五「宮掖門。……本注曰。……北宮朱爵司馬。主南掖門。」、『後漢書』志二十五，劉昭注「古今注曰。永平二年十一月。初作北宮朱爵南司馬門。」
- 38) 『後漢書』卷二「(永平三年)是歳。起北宮及諸官府。」、『後漢書』卷二「(永平八年)冬十月。北宮成。」
- 39) 『水經注』卷十六「魏明帝上法太極于洛陽南宮。起太極殿于漢崇徳殿之故處。改雉門爲閭闔門。」
- 40) 『初學記』卷二十四「歴代殿名。或沿或革。唯魏之太極。自晉以降。正殿皆名之。」
- 41) 『三國志』卷三「(青龍三年)是時。大治洛陽宮。起昭陽，太極殿。築總章觀。」
- 42) 『三國志』卷十三「明帝即位。……是時方營修宮室。朗上疏曰。……若且先成閭闔之象魏。使足用列遠人之朝貢者。……」
- 43) 陸機「贈馮文罽遷斥丘令」(『文選』卷二四)「閭闔既闢。承華再建。」
- 44) 『三國志』卷三，裴松之注「魏略曰……築閭闔諸門闕外罽。」
- 45) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊「河南洛陽漢魏故城北魏宮城閭闔門遺址」『考古』7，2003年，20－41頁。なお、閭闔門が北魏の宮城の正門であったことは、たとえば、次からも明らかであろう。『洛陽伽藍記』卷一「閭闔門前。御道東。有左衛府。府南有司徒府。……御道西有右衛府。府南有太尉府……。」
- 46) 『水經注』卷十六「逕閭闔門南。……魏明帝上法太極于洛陽南宮。起太極殿于漢崇徳殿之故處。改雉門爲閭闔門。」

- 47) 銭国祥・前掲注 4, 2003 年。
- 48) 北魏の太極殿の位置については、たとえば次を参照。葉驍軍・前掲注 23, 1986 年, 101 頁。
- 49) 『後漢書』卷六十下, 李賢注「洛陽記曰。南宮有崇德殿, 太極殿。西有金商門。」なお、『洛陽記』は『太平御覽』などを見るに数種あるが、いずれも魏晉以降の文献であり、また太極殿も記されているので、ここにいう南宮は魏晉の南宮であろう。
- 50) 注 29 を参照。
- 51) 北魏の太極殿が後漢の德陽殿の地に建てられた可能性のあることは、すでに次に指摘がある。葉驍軍・前掲注 23, 1986 年, 86, 101 頁。
- 52) 『三國志』卷四「(高貴郷公) 入于洛陽。羣臣迎拜西掖門南。……至止車門下輿。……遂步至太極東堂。」
- 53) 『晉書』卷三十三「帝發哀於朝堂。……車駕臨送於東掖門外。」
- 54) 太極殿と朝堂の位置関係については、次を参照。郭湖生・前掲注 24, 1991 年。鈴木亘『平安宮内裏の研究』, 中央公論美術出版, 1990 年, 147-170 頁。なお、以上の両者が示すように、すでに曹魏の鄴において、名称は異にするも、文昌殿を西に聽政殿を東に配置する構成がとられていたようである。
- 55) 『三國志』卷四「(高貴郷公) 遂步至太極東堂。」
- 56) 山謙之『丹陽記』(『太平御覽』卷百七十五)「太極殿周制路寢也。秦漢曰前殿。今稱太極曰前殿。洛宮之號始自魏。……東西堂亦魏制於周小寢也。皇后正殿曰顯陽。東曰含章。西曰徽音。又洛宮之舊也。……顯陽……魏曰明(昭の誤り)陽。晉避文帝諱改爲此。……」また、注 22 を参照。
- 57) 太極殿と東西堂については、次を参照。吉田歙「隋唐長安宮城中枢部の成立過程」, 『古代文化』49, 1997 年, 1-18 頁。
- 58) 吉田歙・前掲注 57, 1997 年。
- 59) 華林園については、次を参照。村上嘉實「六朝の庭園」, 『古代学』4-1, 1955 年, 41-60 頁。および、拙稿「古代東アジアの「池と島の園林」と「池と築山の園林」」『佛教藝術』286, 2006 年, 13-56 頁。
- 60) 『三國志』卷二「(黄初五年) 是歲穿天淵池。」
- 61) 『三國志』卷三, 裴松之注「魏略曰。是歲(景初元年)……起土山于芳林園西北陬。」、『三國志』卷二十五「起景陽山於芳林之園。」
- 62) 『三國志』卷二, 裴松之注「臣松之按。芳林園即今華林園。齊王芳即位。改爲華林。」
- 63) 注 59 を参照。
- 64) 郭湖生・前掲注 24, 1991 年, 768 頁。および宿白・前掲注 23, 1978 年。
- 65) 隋唐の長安以前の都市についての基礎的な情報は、たとえば次を参照。葉驍軍(編)・前掲注 23, 1986 年。村田治郎・前掲注 23, 1981 年。拙稿・前掲注 4, 1998 年。張学鋒「六朝建康城的発掘与復元新思路」『南京曉庄学院学报』2, 2006 年, 26-38 頁。
- 66) 『水經注』卷十六「(大夏) 門内東側際城。有魏明帝所起景陽山。餘基尚存。……今也山則塊阜獨立。江無復髣髴矣。」
- 67) 『水經注』卷十六「其水自天淵池東。出華林園。逕聽訟觀南。故平望觀也。魏明帝……恒幸觀聽之。以太和三年。更從今名。」
- 68) 陸機『洛陽地記』(『藝文類聚』卷六三)「宮中有臨高……聽訟。凡九觀。」, 陸機『洛陽記』(『說郛』司六十一) 同上。



## 魏晉洛陽都城制度攷（外村）

- 69) 『晉書』卷五十九「(趙王)倫自華林東門出。及芻皆還汶陽里第。」、『晉書』卷五十九「(惠帝)自華林西門出。居金墉城。」
- 70) 『晉書』卷五十九「(趙王)倫……入自端門。登太極殿。」、『晉書』卷五十九「(惠)帝自端門入。升殿。」
- 71) 應貞「晉武帝華林園集詩」(『文選』卷二十)李善注「洛陽圖經。華林園在城內東北隅。」、『元河南志』卷二「華林園即漢芳林園。」、『元河南志』卷二「(後漢)芳林園在步廣里。」
- 72) 『魏書』卷二十一上「詳常別住華林園之西隅。與都亭、宮館密邇相接。亦通後門。世宗每潛幸其所。肆飲終日。其寵如此。……還華林之館。母妻相與哭。入所居。」、『魏書』卷十「(永安二年)秋七月……庚午。車駕入居華林園。……閏月辛巳帝始居宮內。」
- 73) 注 59, 注 65 を参照。
- 74) 『水經注』卷十六「陸機洛陽記曰。步廣里在洛陽城內宮東。」
- 75) 『宋書』卷三十二「晉孝懷帝永嘉元年二月。洛陽東北步廣里地陷。」
- 76) 陸機「贈馮文麗遷斥丘令」(『文選』卷二十四)李善注「陸機洛陽記曰。太子宮在太宮東。」、陸機「皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩」(『文選』卷二十)李善注「洛陽記曰。太子宮在大宮東。」
- 77) 陸機「皇太子宴玄圃宣猷堂有令賦詩」(『文選』卷二十)李善注「楊奩期洛陽記曰。東宮之北曰玄圃園。」
- 78) 『水經注』卷十六「狄泉。……後遂爲東宮池。」なお、「狄泉」が「翟泉」とも書かれることは、『水經注』卷十六を参照。
- 79) 『洛陽伽藍記』卷一「晉中朝時太倉處也。太倉西南有翟泉。」
- 80) 『洛陽伽藍記』卷一「(建春門內)御道北有空地。擬作東宮。……高祖於泉北置河南尹。中朝步廣里也。」、『水經注』卷十六「翟泉在兩冢之間。側廣莫門道東。建春門路北。路即東宮街也。」
- 81) 『水經注』卷十六「謂之銅駝街。舊魏明帝置銅駝諸獸于闔闔南街。陸機云。駝高九尺。背出大尉坊者也。」、陸機『洛陽記』(『太平御覽』卷百五十八)「洛陽有銅駝街。漢鑄銅駝二枚。在宮南四會道。相對。」
- 82) 陸機『洛陽記』(『太平御覽』卷百五十八)「洛陽有銅駝街。漢鑄銅駝二枚。在宮南四會道。相對。」
- 83) 『水經注』卷十六「水西有永寧寺。……渠左是魏晉故廟地。」
- 84) 『晉書』卷十九「至(太康)十年。乃更改築於宣陽門內。……廟成。」
- 85) 『建康實錄』卷九, 原注「(東晉孝武帝)因修築。欲依洛陽改入宣陽門內。」
- 86) 『後漢書』卷一上, 李賢注「陸機洛陽記曰。太學在洛陽城故開陽門外。去宮八里。」、『水經注』卷十六「漢魏以來。置太學于國子堂東。」、潘岳「閑居賦」(『文選』卷十六)李善注「郭緣生述征記曰。國學在辟廱東北五里。太學在國學東二百步。」、『洛陽伽藍記』卷三「開陽門御道東有漢國子學堂。」(なお、『洛陽伽藍記』の基本的な読み方にしたがえば、國子學堂は開陽門から一里以内にあったように思われる。)
- 87) 『水經注』卷十六「逕闔闔門南。……魏明帝上法太極于洛陽南宮。起太極殿于漢崇德殿之故處。改雉門爲闔闔門。」
- 88) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏故城隊・前掲注 45, 2003 年, 20 - 41 頁。
- 89) 戴延之『西征記』(『藝文類聚』卷六十五)「洛陽舊有二市。一曰金市。在宮西大城內。」
- 90) 『洛陽伽藍記』卷一「長秋寺。……在西陽門內御道北一里。亦在延年里。即是晉中朝時金市處。寺北有濠池。」、『水經注』卷十六「陽渠水南暨闔闔門。……渠水又東。歷故金市南。直千秋門。」
- 91) 王仲殊・前掲注 2, 1984 年, 23 - 24 頁。
- 92) 『三國志』卷二, 裴松之注「臣松之案。諸書記。是時帝居北宮。以建始殿朝羣臣。門曰承明。」

- 陳思王植詩曰。謁帝承明廬是也。至明帝時。始於漢南宮崇德殿處。起太極，昭陽諸殿。」
- 93) 『三國志』卷十三「明帝即位……今當建始之前足用列朝會。崇華之後足用序內官。華林天淵足用展游宴。」
- 94) 『後漢書』志十四，劉昭注「魏志曰。建安二十五年正月。曹公在雒陽。起建始殿。伐濯龍樹而血出。」
- 95) 『三國志』卷十七「黃初二年。(張)遼朝洛陽宮。文帝引遼會建始殿。」
- 96) 『後漢書』卷二十二，李賢注「洛陽記曰。建始殿東有太倉。倉東有武庫。」
- 97) 『洛陽伽藍記』卷一「(建春門內)御道北有空地。擬作東宮。晉中朝時太倉處也。」
- 98) 『三國志』卷三「(青龍三年)秋七月。洛陽崇華殿災。……命有司復崇華。改名九龍殿。」
- 99) 『洛陽伽藍記』卷一「千秋門內道北有西游園。園中有凌雲臺。即是魏文帝所築者。……(釣臺)西有九龍殿。殿前九龍吐水成一海。」
- 100) 『三國志』卷三，裴松之注「魏略曰。(青龍三年)……通引穀水過九龍殿前。爲玉井綺欄。蟾蜍含受。神龍吐出。」，『水經注』卷十六「伏流注靈芝九龍池。魏太和中。皇都遷洛陽。……發石視之。曾無毀壞。又石工細密。非今之擬。……遂因用之。」
- 101) 『洛陽伽藍記』卷一「千秋門內道北有西游園。園中有凌雲臺。即是魏文帝所築者。……(釣臺)西有九龍殿。殿前九龍吐水成一海。」
- 102) 『元河南志』卷二「俗傳。東西六里南北九里。亦曰九六城。」
- 103) 『後漢書』志十九，劉昭注「帝王世紀曰。城東西六里十一步。南北九里一百步。」，『後漢書』志十九，劉昭注「晉元康地道記曰。城內南北九里七十步。東西六里十步。」
- 104) 『晉書』卷十四，原注「洛陽……東西七里南北九里。」，『太平寰宇記』卷三「按洛陽記。洛陽城東西七里南北九里。」
- 105) 陸機『洛陽記』(『藝文類聚』卷六十三)「洛陽城。周公所制。東西十里。南北十三里。」
- 106) 陸機『洛陽記』(『太平寰宇記』卷三)「洛陽十二門。南北九里。」
- 107) 居住区については、たとえば、長安についてなら『三輔黃圖』、『長安志』、洛陽についてなら『洛陽伽藍記』、『元河南志』、建康についてなら、『景定建康志』、鄴についてなら『(嘉靖)彰德府志』などを参照。
- 108) 『水經注』卷十六「水西有永寧寺。……其地是曹爽故宅。」
- 109) 『洛陽伽藍記』卷一「昭儀尼寺。……在東陽門內一里御道南。……寺有池。……後隱士趙逸云。此地是晉侍中石崇家池。」
- 110) 陸機『洛陽記』(『太平寰宇記』卷三)「洛陽十二門。南北九里。」
- 111) 『晉書』卷十四，原注「東有建春。東陽。清明三門。南有開陽。平昌。宣陽。建陽四門。西有廣陽。西明。閭闔三門。北有大夏。廣莫二門。」
- 112) 『水經注』卷十六を参照。
- 113) 都城門の考古学的調査については、次を参照。中国科学院考古研究所洛陽工作隊・前掲注 19, 1973 年。
- 114) たとえば、王仲殊・前掲注 2, 1982 年, 510 頁。
- 115) 水野清一「永寧寺と洛陽都城」, 『中国の仏教美術』, 平凡社, 1968 年, 303 頁。
- 116) 『後漢書』志二十七「本注曰。雒陽城十二門。其正南一門曰平城門。……津門。小苑門。開陽門。……」, 『後漢書』は都城門を左回りに記している。
- 117) 『晉書』卷十四，原注「洛陽。……南有開陽。平昌。宣陽。建陽四門。」, 『晉書』原注は都城門を右回りに記している。

魏晉洛陽都城制度攷（外村）

- 118) 『洛陽伽藍記』序「次西曰津陽門。漢曰津門。魏晉曰津陽門。高祖因而不改。」
- 119) 『後漢書』卷一上、李賢注「陸機洛陽記曰。太學在洛陽城故開陽門外。」
- 120) 『洛陽伽藍記』序「漢曰平門。魏晉曰平昌門。」
- 121) 李尤「平城門銘」（『太平御覽』卷百八十三）「平門督司。午位處中。」
- 122) 『水經注』卷十六「舊平城門所在矣。今塞。」
- 123) 『水經注』卷十六「逕平昌門南。故平門也。」
- 124) 『洛陽伽藍記』序「平昌門。漢曰平門。魏晉曰平昌門。高祖因而不改。」
- 125) 『水經注』卷十六「逕宣陽門南。故小苑門也。……皇都遷洛。移置于此。」
- 126) 陸機『洛陽記』（『太平御覽』卷六十八）「冰室在宣陽門內。」
- 127) 『洛陽伽藍記』卷一「（閭闔門前）御道西。……社南有凌陰里。即四朝時藏冰處也。」
- 128) 『水經注』卷十六「閭闔門。漢之上西門者也。……太和遷都。掖門南側。」、『水經注』卷十六「西陽門。舊漢氏之西明門也。……舊門在南。……故徙是門。東對東陽門。」、『洛陽伽藍記』序「西面有四門。南頭第一門曰西明門。漢曰廣陽門。魏晉因而不改。……次北曰西陽門。漢曰掖門。魏晉曰西明門。……次北曰閭闔門。漢曰上西門。……魏晉曰閭闔門。」
- 129) 中国科学院考古研究所洛陽工作隊・前掲注 19, 1973 年, 200 頁。
- 130) 注 107 を参照。
- 131) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城工作隊「北魏洛陽外廓城和水道の勘査」、『考古』7, 1993 年, 602-608 頁。
- 132) 『洛陽伽藍記』卷五「（北魏）京師東西二十里。南北十五里。」なお、詳しいところは後考に委ねたいが、北魏の東と西の外郭壁は方一里の基本区画による外郭内居住区のすぐ外に築かれたものではなかった可能性がある」と筆者は考えている。一方、そのようには考えない説もある。次を参照。佐川英治「北魏洛陽の形成と空間配置」『大阪市立大学東洋史論叢特集号（中国都市の時空世界）』, 2005 年, 28-47 頁。
- 133) 洛陽の外郭とくに郭門については、次が詳しくすぐれているので、ここでは大いに参考にする。楊寛・前掲注 23, 1987 年, 149-173 頁。また、次を参照。拙稿・前掲注 3, 2004 年, 23 頁。
- 134) 『水經注』卷十六「（宣武場西）故賈充宅也。」、『洛陽伽藍記』卷五「城北。……中朝時宣武場。在大夏門東北。」
- 135) 『後漢書』卷二十九、李賢注「陸機洛陽記曰。上商里在洛陽東北。」
- 136) 潘岳「河陽縣作」（『文選』卷二十六）李善注「郭緣生述征記曰。北邙去大夏門。不盈一里。」、および次を参照。森鹿三「北魏洛陽の規模について」『東洋学研究・歴史地理篇』, 東洋史研究会, 1970 年, 244-261 頁。
- 137) 度量衡は、たとえば次を参照。山田慶児（訳）・中国国家計量総局（主編）『中国古代度量衡図集』, みすず書房, 1985 年。
- 138) 『洛陽伽藍記』卷二「在東陽門外二里。御道北。所謂暉文里。……趙逸云。暉文里是晉馬道里。……是蜀主劉禪宅。……是吳主孫皓宅。……是晉司空張華宅。」、戴延之『西征記』（『太平御覽』卷百八十）「東陽門外道北。吳蜀二主第宅。去城二里。墟基猶存。」
- 139) 潘岳「閑居賦」（『文選』卷十六）李善注「陸機洛陽記曰。洛陽凡三市。大市名曰金市。……城中。馬市在大城之東。洛陽縣市在大城南。」
- 140) 『洛陽伽藍記』卷二「七里橋東一里。郭門開三道。……送去迎歸。常在此處。」
- 141) 『洛陽伽藍記』卷二「七里橋。……中朝杜預之荊州出頓之所也。」、『世說新語』卷三, 方正第

五「杜預之荊州。頓七里橋。朝士悉祖。」

- 142) 潘岳「閑居賦」(『文選』卷十六)李善注「陸機洛陽記曰。……洛陽縣市在大城南。然此市洛陽縣也。」
- 143) 南郭内にあった潘岳の邸宅については、次を参照。拙稿「西晉の潘岳の閑居と山水論について」『ランドスケープ研究』68(2), 2004年, 165-173頁。
- 144) 『洛陽伽藍記』卷三「宣陽門外四里。至洛水。上作浮橋。」
- 145) 『三國志』卷一, 裴松之注「獻帝春秋曰。天子初至洛陽。幸城西故中常侍趙忠宅。」
- 146) 『洛陽伽藍記』卷四「出師於洛陽城西張方橋。即漢之夕陽亭。」、『洛陽伽藍記』卷四「因名爲張方橋也。……朝士送迎。多在此處。」
- 147) 『晉書』卷四十「百僚餞於夕陽亭。」
- 148) 『洛陽伽藍記』卷四「出閭闔門城外七里。長分橋。……故名曰長分橋。……因名爲張方橋也。」
- 149) 錢国祥・前掲注4, 2003年。
- 150) 注54を参照。
- 151) この点については、次を参照。楊寛・前掲注23, 1987年, 149-173頁。
- 152) 北魏の洛陽遷都にあたり、次のような文章があることも注目されよう。  
『魏書』卷六十「(韓)顯宗上書。……今洛陽基址。魏明帝所營。取譏前代。……」

#### 挿図出典

- 図1, 王仲殊・前掲注2, 1982年。
- 図2, 楊守敬・前掲注10, 1967年。
- 図3, Bielenstein, Hans: op. cit. 1976。
- 図4, 錢国祥・前掲注4, 2003年。
- 図5, 郭湖生・前掲注24, 1993年。
- 図6, 『永樂大典』卷9561。
- 図7, 『永樂大典』卷9561。
- 図8, 筆者作成。
- 図9, 王仲殊・前掲注2, 1982年。
- 図10, 錢国祥・前掲注4, 2003年。

**後記** 小稿は、基本的には、田中淡先生が主宰されていた研究会の報告書用原稿として先に提出していたものを、2003年に錢国祥氏によって新説が発表されたので、2007年に人文科学研究所の客員の機会が得られた時に、錢氏の説に対する私見を含める内容に書き改めたものである。

## 要 旨

小稿は、従来の通説では、宋の裴松之の『三國志』注にもとづき、魏晉の洛陽は後漢を継承したものに過ぎないとされてきたが、そうではなかったらしいことを文献学的に明らかにし、新たな復元概念図を提示するものである。あわせて近年の考古学的解釈における問題点を指摘する。魏晉の洛陽は、とくにその主要部の制度は、後漢の洛陽とも隋唐の長安とも大きく異なる構造を採っていたらしい。一方、魏晉の洛陽の制度は、魏晉南北朝の帝都の制度の規範となっていたらしく、南朝の建康、北魏の洛陽に大いに継承されている。したがって、魏晉の洛陽は、制度的に見て魏晉南北朝を最も代表する帝都であったと見てよく、この点により中国の都城制度史上極めて重要な都市のひとつにあげられるべき都市である。魏晉の洛陽が後漢の洛陽および隋唐の長安と大きく異なっていた点として、次があげられる。①魏晉の宮城の最主要部は、太極殿が建てられた南宮であった。②太極殿が西に、朝堂が東に配置されていた。③太極殿東西二堂形式が採られていた。④王朝を最も代表する園林として、天淵池と景陽山を主要な構成要素とする華林園が宮城主要部（南宮と北宮）の北にあった。⑤宮城主要部は都城の中ほどに位置し、宮城主要部を取り囲むように都城があり、さらに都城を取り囲むように外郭があった。すなわち、宮城と都城と外郭が偏りのより少ない三重構造を採っていた。なお、以上の点のいずれもが曹魏の明帝による造成に関わるものであることは注目に値しよう。また、華林園を除けば、魏晉の宮城の規模は、大方北魏と同じで東西一里半、南北三里ほどあったらしい。都城の規模は、魏晉の頃には「九六」ではなく東壁の張り出し部を一里と見なし、東西七里、南北九里と考えられていたらしい。魏晉の外郭の規模は、外郭壁については分からないが、外郭内居住区で見た場合、大方洛水以北の北魏と同じく東西二十里、南北十五里ほどあったらしい。

キーワード：魏晉、曹魏、明帝、洛陽、都城

## Summary

This paper contradicts the conventional common belief that the layout of the capital city Luoyang in the Wei and Jin dynasties (220–316) was strongly based on that of the city in the directly preceding Eastern Han dynasty (25–220), through analyzing the historical documents in detail. It also shows that the belief seems to be based on Song dynasty scholar Pei Songzhi (372–451)'s misunderstanding, which is seen in his commentary on Sanguozhi, or History of the Three Kingdoms. Moreover, this paper points out problems in the archaeological interpretations of recent years and explains the characteristics of the layout of Luoyang in the Wei and Jin dynasties, while presenting a revised conceptual reconstruction plan. It should be noted that the new layout of Luoyang was largely created and completed during the reign of Emperor Mingdi (r. 226–239) of the Wei dynasty. This layout seems to have become the normative model for the layout of the capital city Jiankang in the Southern dynasties (420–589) as well as Luoyang in the Northern Wei dynasty (386–534). However, the layout of Luoyang was not adopted for the capital Chang'an in the Sui and Tang dynasties (581–907).